





背後を意識しはじめたのは自分がまだ高校生の頃だったと思う。

後頭部に目でも付いておれば、360度、全方向見渡せるのだが、

人間の体というのは顔面に二つの目が付いているだけであり、

前方正面の景色しか確認することができない。

「ああ、不安だ...」

後ろに何があるか、不安でたまらない高校生は、時おり首を曲げては後方を確認した。

同級生と比べて、彼の神経は異常で過敏であった。

が、年齢的にまだ幼い彼は、それが繊細たる思春期の一事象に過ぎないものと解釈していた。

やがて彼は、背後に存在する、存在しているが確認のできない背後の存在に、妙な力を感じるようになった。

何か後ろに引っ張られるような、背中から後頭部にかけてそんな引力を感じた。

最初はそれがあつかないかさえも定かでない、微々たる力であったが、一晩明けるごとに徐々にその力は強まっていった。

油断して全身の力を抜けば、後ろに倒れてしまうのではないかと。

彼は背後の引力に抵抗せねばまともに立ってられないようになった。

そこでようやく、彼は周囲に相談した。

「俺の後ろに誰かいないか？」

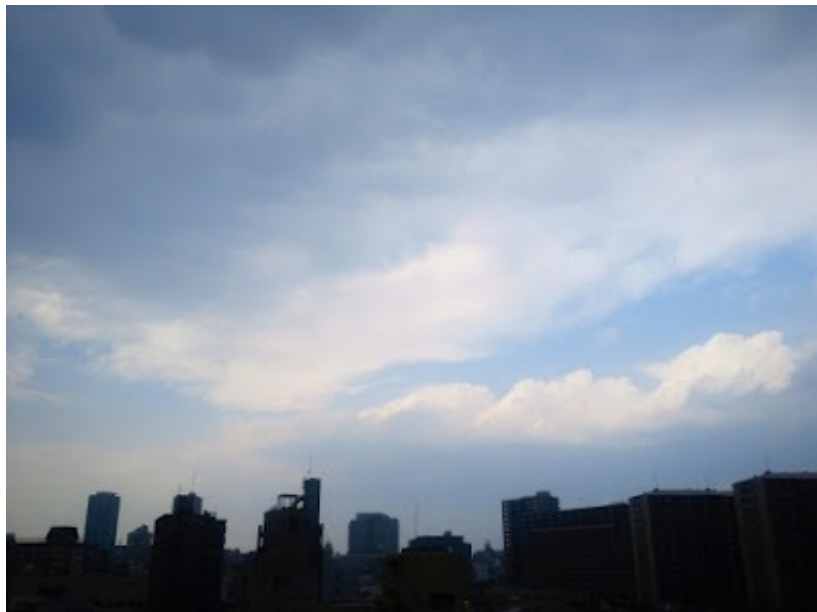
無論、彼の背後には空白の景色が広がっているだけで、

周囲はそんな彼を気味悪がって遠ざけるようになった。

以来、彼は誰に打ち明けることもなく、一人背後の存在を気にしながら日々を過ごした。

「なるべく考えないようにしよう。背後を意識しなければ、忘れているうちは何もない。考えないようにしよう。」

そうして『背後』をうまく誤魔化しながら、周囲の友達と同じように日常を振舞った。



私は28歳になった。

まもなく夏が来ようとする、そんな陽気であった。

その日はいつもと変わらない朝であり、

私は苺ジャムを塗ったトーストを食べながら、胡座をかいてテレビニュースを眺めていた。

急に私は背後が気になった。

「後ろに誰がいる。」

久しぶりの感覚に驚いて、後ろを振り向いたが、見慣れたベージュ色の壁が目に映るだけであった。

再び前方を向き、テレビに視線を戻そうとしたとき、手にしていたトーストが宙に飛んだ。

バタリと、後ろに卒倒した。

強い磁石に引っ張られるように、勢いよく私は後ろへと倒れ、トーストがぽてりと地に落ちるのが目に入った。

仰向けの状態で、私はゆっくりと目を閉じた。

「ああ、そうだ。忘れていたなあ。」

しばし呆然としたまま、時間だけが流れた。

やがて、テレビニュースの「次のコーナーにまいりましょう」という声で我に返った。

後ろに倒れてしまわぬよう背後に抵抗しながら、重い体をゆっくりと持ち上げた。

私は胡座をかき、『前方』を見つめて思った。

怯えた表情で逐一後ろを確認しながら、一步一步、前方に向かって歩いて行く。

「これからもそうなんだろう。」

背後は今日も在る。 これからも在る。

後ろへ後ろへ引っ張るように。そのまま私を倒し、二度と起き上がれないように。

背後の存在、それが私の想像力であるように、
歩く力、それもまた私の想像力である。

私の想像力は前を向いているか、後ろを向いているか。

目標なくした現代人。

旅人が流砂の中を前傾姿勢で歩くように、足取りは重い。

